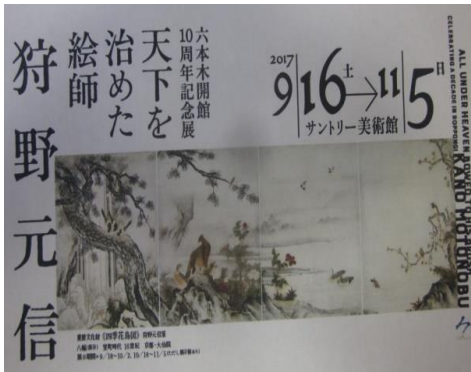


天下を治めた絵師 「狩野元信」

サントリー美術館（東京ミッドタウン） 2017.09.16～11.05

「サントリー美術館」は、1961年に基本テーマ「生活の中の美」とし、古美術を中心とした私立美術館として開設され、現在は大規模な美術館が集結している「六本木アート・トライアングル」の一つとして重要な拠点となっている。



「狩野元信」（1477?～1559）は、血縁関係でつながった「狩野家」を核とする絵師専門集団の「二代目」で、室町時代より長きにわたり画壇の中心を担ってきた。

そして、「元信」は、極めて卓越した画技を有したため、その作品は歴代の狩野派絵師の中でも高く評価されて、近世における「狩野派」繁栄の基礎を築いた画伯である。

従来の漢画系の絵師たちは、中国絵画の名家（めいか）による手本に倣った「筆様（ひつよう）」を巧みに使い分けて注文に応じていたが、「元信」が狩野派の台頭を支えた大きな要因のひとつには「画体（がたい）」の確立がある。

彼はこれまでの「筆様」を整理・発展させ「真・行・草（しん・ぎょう・そう）」の三種の「画体」を生み出して、その「型」を弟子たちに学ばせることにより、集団的な作業活動を可能にしてかなり効率的な制作活動を行っていた。

《四季花鳥図》（上部は部分、下部は拡大図） 重要文化財 大徳寺大仙院蔵

室町時代に大徳寺の塔頭の方丈「檀那の間」に描かれた自然風景の「水彩画」で、襖8面にわたる大画面が巨大な松樹を中核的題材として構成されている。

この「襖絵」は、宋元画の伝統をひく古典主義と時代の要請する力強い表現が融合した傑作で、花鳥にのみ施された濃彩がきわめて鮮烈な色彩効果をあげ、大胆・繊細さがあがり楽しさとのバランスがよい作品とされている。

